

学寮・体育館保存活動の顛末記

—90年の時空を超え、青春に戻る

松田宣子 (ラリジャーナリスト)

スクラップ&ビルドは、経済成長には必要だし、宿命だという意見もあるが、本当にそうだろうか。この本は、学校建築物を巡って、スクラップ&ビルドすることの意義を世に問うた記録とも言える。

創立90年余りの歴史を持つ東京女子大学の同窓生たちが、学寮と体育館の解体に再考を求めて経営者側に粘り強く道義的に働きかけ、ついに要望が通らなかつた顛末を冷静に資料的にまとめた、刮目すべき記録本である。

東京女子大はキリスト教精神

喪われたレーモンド建築
—東京女子大学東寮・体育館—
東京女子大学レーモンド建築 東京
・体育館を活かす会編著



工作舎発行 / 2012年
A5判・301P / 税込2520円

神のもと、日本の第一級の女子教育を目指して創設されたキャンパス建設は海外のミッシェンの協力で実現した。9棟の建物は、チエコ出身のアメリカ人建築家、アントニン・レーモンドの設計。彼は「日本近代建築の父」と言われる。特に解体の対象となつた学寮と体育館はチエコ・キュビズムの特徴を持つ。

鉄筋コンクリートづくりで個室という、当時としては「日本初」の学寮は集団生活と協働の場でもあった。またレーモンドの息吹を伝える体育館は全学生の社交場ともなつた。その学寮と体育館を解体すると、同窓会で唐突に公表されたことから、卒業生有志が立ち上がり、さらに「東京女子大学レーモンド建築東寮・体育館を活かす会」に発展する。

結論からいえば、「東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会」の八面六臂の活動もむなく、大学経営者の計画どおり、両方の建物はキャンパスから姿を消してしまふ。一面「敗戦記」でもあるが、その根底に流れる女性の教育や古い建築物への視点と思考。また、テーマこそ違え、女性団体活動とも通底する様相が共感を呼ぶ。

卒業生であり、同会の発起人でもある歴史作家の永井路子氏が強調する客観的史料と言つてよい。前半の学寮の思ひ出や体育館への愛着もさることながら、後半の年表や資料に圧倒される。同会代表の藤原房子氏や永井氏と対向する理事長との往復書簡。息詰まる内容である。

はじめは少ない人数から、やがて、建築の専門家や、学寮を超えて教職員や学生にまで、運動の輪は広がっていく。それを細大もらさず、記録し、制作したCD-ROMも付く。事務局となつた卒業生の世代を超え、職種も超えたスクラムの結実を胸を打つ。

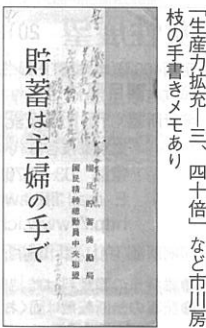
図書室だより

国民精神総動員下の家庭生活関連資料

国民精神総動員下の家庭生活関連資料

政府は、戦争の長期化に伴い、国民精神総動員運動を強化、「消費節約・配給制・貯蓄の普及・廃品回収」などの物資需給計画に関する声明を1938(昭和13)年6月発表した。

当然家庭生活に大きく関わる事項であり、各女性団体を介して主婦層に呼びかけた。すでに同年4月、国民精神総動員中央連盟は「家は国の礎」を掲げ、「家庭報国三綱領」(写真をほか



「生産力拡充一三、四十倍」など市川房枝の手書きメモあり

の呼びかけ文を広く配布、実践普及の徹底化を行っている。

「貯蓄は主婦の手で」の標語(写真をのちに、大蔵省管理下の100億円国民貯蓄政策実現のため、39(昭和14)年3月女性団体の幹部(市川房枝・大妻コタカ・大江スミ・木内キヤウ・羽仁もと子ら)31名を嘱託任命、各地方での講演、懇談会など活発な行動を示す関係資料が敗戦の年まで残されている。

武器を持たない女性たちも、強制的な総動員体制化の渦に巻き込まれていく当時の時代状況を、改めて把握できる資料群である。

「家庭報国三綱領」第一 健全なる家風の作興 第二 適正なる生活の実行 第三 皇民としての子女の養育



市川への国民精神総動員本部参与委嘱状40(昭和15)年5月1日